客船よもやまばなし

＜連載㊳＞

高級クルーズ客船「クリスタル・ハーモニー」

大阪府立大学船舶工学科助教授
池田良穂

日本郵船 が三菱長崎造船所で建造していた大型クルーズ船客「クリスタル・ハーモニー」がこの6月に完成し、7月から営業航海を開始したことは、マスコミの多彩な報道で、既にご承知のことであろう。日本でも欧米のクルーズ市場で十分に対抗できる本格的な大型客船が登場したわけで、古くからの客船ファンにとってはまさに感無量である。彼女の北米市場での大成功を願わずにはいられない。

建造途中から 彼女には頻繁に接する機会に恵まれた。それは、スウェーデンの船舶関係年鑑「デザイン」の90年版に、彼女の建造を通して日本の造船の客船建造の能力、可能性について執筆して欲しいとの依頼があったためであった。この本の編集者クラス・ブログレンは実は船キチが高じて今の職業を持ったというこの世界では新進気鋭の人物で、筆者とは10数年来の友人である。彼に筆者と谷井氏で執筆した「客船ができるまで」－豪華客船ふじ丸－（偕成社刊）を贈呈したところ、この本のように船の技術をある程度わかりやすく解説しながら、日本の造船業界の客船にかける意気込みを紹介してほしいというのが、彼の依頼内容であった。これが昨年6月のことであった。

筆者もこの時まだ、「クリスタル・ハーモニー」が実際にどのような船になるのか、三菱長崎造船所がどのような態勢で建造に着手しているのかを知らなかったので、一度建造中の彼女を見てから執筆するかどうかを決めると返事をしておいた。英語で記事を書くのもなんとなく煩わしかった。しばらくこの件をほっておいたところ、クラスから頻繁に催促のファックスが入ってくる。ついに重い腰をあげて、三菱長崎造船所に彼女を訪ねたのが、昨年9月の末のことであった。この時、筆者は昭和海運の小型クルーズ客船「オセアニック・グレイス」に神戸から乗船して瀬戸内海の航海を満喫して長崎に入った。長崎に入ったちょうどその日、クリスタル・ハーモニーは進水式を迎えていた。残念ながら、晴れがましい船台からの進水ではなく、ドックでの進水だったが、空にはなん機ものヘリコプターが飛びなかなか華やかであった。

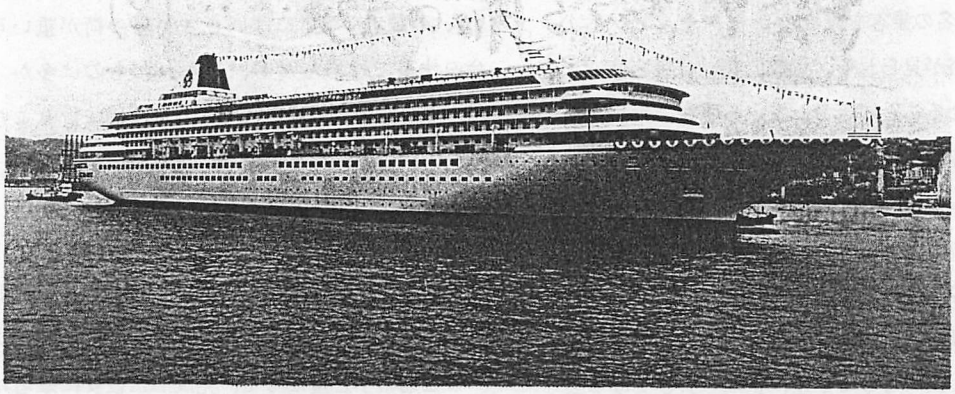
進水後2日目、 三菱重工長崎造船所を訪れた。設計部長の平井氏、次長の福島氏とお会いし、同船建造の経緯を伺い、同造船所内につくられた内部のモックアップを見学、さらに建造中の

船内もつぶさに見学させて頂いた。その第一印象は、とんでもない豪華客船が建造されつつあるな、ということであった。最近建造される現代的クルーズ客船とは一線を画した、本物指向の船作りがなされていたのである。5万トン近い船内にわずか960名の乗客を乗せるから、キャビンも公室にも余裕が見られる。比較的安い材料を使って豪華に見せることに苦労している現在の大型大衆クルーズ客船とは全く違ってあらゆるところに一級品を使っている。クルーズ市場を頂点の鋭い三角形だとすると、この船はその頂点の市場を狙うクルーズ客船のようだ。この見学を終えて、この記事を執筆させてもらうのは大いに名誉なことだと感じ、大阪に帰って早速、執筆を引き受けるとの返事をクラスにフアックスで送った。

この後、本業その他の忙しさと、英語能力の不足からなかなか執筆ははかどらなかったが、今年5月末の締切になんとか間に合わせることができた。この間、2回長崎まで飛行機で飛び、着々と建造される同船を見学することが出来た。この時に、出会った長崎造船所の人々は、納期に追われた大変な毎日を送っていたにも拘らず、何とも生き生きと情熱に燃えた表情をしていたのが印象的であった。まるで、客船作りに恋をしてしまったように。

完成を間近に迫った6月の上旬に、日本海事新聞の企画によるクリスタル・ハーモニー完成記念特集の座談会の司会を依頼され、三菱重工の飯田会長と日本郵船の宮岡会長のお話しを聞く機会に恵まれた。今度は建造所および船会社のトップの立場としての客船作り哲学を伺うことができ（7月4日付け日本海事新聞第2部をご参照ください)、若輩者の筆者にはいささか肩の荷が重い司会の仕事ではあったが、得られたものは多かった。この座談会で得られたものも原稿に折りこむべく、原稿の修正を行って、最終原稿をスウェーデンに送ったのは6月中旬のことであった。

ちょうど クリスタル・ハーモニーが完成した頃は、韓国での学会への参加、そして西ドイツへの短期留学と重なって、完成した彼女に筆者はまだ会っていない。しかし、西ドイツ（現在は統一ドイツ）に滞在中もたくさんの船のファンが彼女の麗姿を写真に取って送ってくれた。さらに、前号で紹介したバルト海のクルーズ客船デルフィン・クリッパーのインフォメイション・デスクでも彼女の絵はがきに出会った。インフォメイションの女性乗組員の友人から送られてきたものとのことで、彼女自身もできればクリスタル・ハーモニーに乗り組んでみたくて、応募中とのことであった。日本の誇るクルーズ客船クリスタル・ハーモニーの話題が欧州の外れのバルト海の小さなクルーズ客船にまで浸透していることを知って、またまた感無量の筆者であった。



クリスタル・ハーモニー